［自伝小説］

わが道を求めて（第二回）

人間をはぐくんでくれるもの

長崎　明
さしえ　竹内秀明

サキ、ザキの話

新潟市東中通、山崎ビル二階にあるわが「にいがた県民教育研究所」の事務所は、ビルの谷間のようなところで、窓を明け放ってもほとんど風が入らない。そのかわり陽もささない。今夏は殊のほか残暑きびしかったが、財政困難だから、クーラーがないのは勿論のこと、扇風機もたった一つしかない。事務局員一同といっても、常には二、三人だが、めいめいに手動式送風器（つまりは扇子か、団扇）をパタパタさせながら、暑気払いの雑談に花を咲かせることもある。たった一人の女性事務員、

この「たった一人」は、「女性」にも、「事務員」にもかかるのだが、その竹内さんが、時々アイスコーヒーをご馳走してくれる。そんな時、私の「自伝小説」なるものが話のタネになる。

○若月（本誌編集長＝執筆当時）

先生の自伝小説、早くも読者から反響があって、ゆくゆくは単行本にしたらとの話もあります。版をとってあるので、そのまま本にできるんです。一五、六回分あれば一冊になるでしょう。是非お願いします。

○長崎

ちょっと待って下さいよ。私はそんなつもりで書き始めたわけではないのです。第一、うちの機関誌は季刊でしょ。年四回の雑誌に四年も書き続けるなんて。

○若月

それはともかくとして、先生のお話の第一回に、この「にいがた県民教育研究所」の事務局では、先生が最年長、と書いてあったけど、実は、私、一九二三年六月生まれなんです。

○長崎

それは失礼しました。自伝小説とはいえ事実に反することを書いて、もしも個人的にご迷惑をおかけすることがあってはいけないので、訂正しておきましょう。

○八木（本会副会長）

大体ですね。大正一二（一九二三）年はいのしし年だから、猪突猛進型、いそがしがりや、そそっかしやが多いんじゃないですか。

○若月

じゃあ、八木先生、なにどしですか。

○八木

ヤギどしですよ。

○長崎

子どもの頃から「お前は何とか年だから」としょっちゅう引き合いに出されていると、何とはなしにその動物に似て来る、それも人間が勝手に作ったイメージに、ね。

私は、十才前は病気がちだったので、とても猪突猛進とは行かなかったが、いそがしがりや、そそっかしや、というのは当たっているようです。

○若月

ああ、それから、先生のナガサキの「サキ」の字ですね。立のサキ「﨑」は、諸橋漢和大辞典にも角

川中辞典にも載っていませんね。土へんの「埼」もそうです。崎も埼も、「みさき」、「山のはし」のような突き出たところを意味しています。「ながいさき」といっても、時間的な「サキ」ではなく、空間的、地域的な「サキ」というようです。

○長崎

そうすると、「長い先きは明るい」というのは、未来とか将来とかではない、岬の先きが明るいということかな。

○木村（本会事務局長）

中国から渡って来た漢字がそうだとしても、日本に来てから、いろいろに使われているから、別に構わないではないですか。

○若月

わが国では、人名、地名にはかなり漢字を作り変えたのがあるようですから、先生のご先祖さまが、いつの頃からか、「崎」をお使いになったのでしょうね。

それから、ナガサキさんだけでなく、ヤマザキさんも、崎と埼があって、先日、わが「にいがた県民教育研究所」の総会の際に、議長を務めて下さったヤマザキさんは「山崎」だそうです。彼は本誌編集委員としても活躍しています。

○八木

山崎にしろ、山崎にしろ、ヤマザキと読む人とヤマサキと読む人とがいるね。五十嵐もイカラシ、イガラシ両方ある。人名の時はイカラシ、地名の時はイガラシとの説もあるようだ。豊田もトヨタ、トヨダの両方あるが、人名の時は濁らないようだ。

○若月

それから、埼玉の埼はサイであって、サキとは読まない、と書いておられたが、新潟市の隣りの黒埼町はクロサキと読んでいますよ。

○長崎

いやぁ、まいった、まいった。自伝小説だと高を括ったが、さすが編集長、良くぞ調べて下さいました。一冊の本になろうがなるまいが、教育研究所の機関誌ですからきちっとすべきところはきちっとしておく必要があるんですね。

長崎家、長崎姓のこと

○木村

先生のおうち、長崎家のことをもう少し聞かせて

下さい。先生のおくには村松町とのこと。あそこは村松藩でしたが、先生のお家もおさむらいさんだったのですか。

○小熊（本会事務局担当常任理事）

戦前、履歴書に、平民とか士族とか書く欄があったっけ。あれは差別だな。

○長﨑

中学校への入学願書を出す機会（一九三六年三月）に生まれて初めて履歴書を自筆させられた。その時、氏名の横に「士族」と書けと、おやじに教えられた。士族って何かと尋ねたら、武士の家柄という意味だとのこと。じゃあ、お先祖さまって偉かったのかと聞いたら、まあ、家族四、五人養える程度の足軽だった、との返事でした。一人一年一石（こく）として五人扶持だと五石ていど。それでも、第二次大戦中、座敷の長押（なげし）にヤリとトビグチが飾ってあり、玄関には「丸に三つ柏」の家紋入りの陣笠と提灯が置いてあった。もっとも、トビグチと提灯は空襲に備えてのものであった。また、裏の物置小屋の奥に、束（つか）に金銀飾りの付いた日本刀が蔵ってあって、私が軍隊に徴兵された場合、実戦用に作り直して貰うことになっていると聞かされた。もっとも、これは、私が台北高校二年の時（一九四一年八月）、生まれ故郷を初めて訪れた折り、祖父（信吉）から聞いた話である。

この時、祖父は私の帰郷が余程嬉しかったに違いない。思えば、大正一四年（一九二五）三月以来約一六年振り、あととりの孫との束の間の再会だった。

その頃、私を含め一家は台北で暮らしていました。一九四一年八月といえば、その数カ月後にいわゆる大東亜戦争の始まる緊迫した情勢下でした。夏休みを利用して台北高校剣道部の内地遠征に参加したいという私の希望を良くも容れてくれたものですが、その時の両親の心の中には、あととり息子を郷里の祖父母に会わせる最後の機会との思いがあったに違いない。そんなこととは露知らぬ私は、福岡での試合の後、神戸の親戚（祖父の弟）の家を足場に、大阪、京都、奈良から淡路島まで回って、村松に着いたのは離台後二週間もたってからのことでした。

村松では、歓待を受けると同時にあととりとしての教育（？）をも受けました。そして、祖父方、祖母方、父方、母方それぞれの親戚を紹介して貰いました。とにかく年寄りが多いことと、私が長﨑家の七代目ということくらいしか頭に残りませんでした。

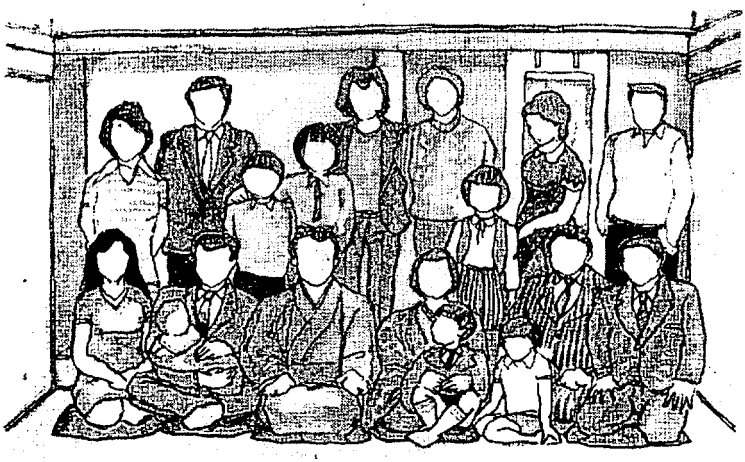
○竹内（事務員）
　長崎先生のおうちは、随分由緒のあるお家柄なんですね。
○長崎
　とんでもない。身分の低い足軽にすぎなかったのです。そのうえ、私で七代目とはいっても、あととりがなくて両養子をむかえたりして、いわゆる血の繋がりがなく、ただ長崎姓だけが受け継がれてきた、といって良さそうです。姓の繋がりを大切にするという考えは、「家を守る」あるいは「墓を守る」という考えに通ずるのでしょう。しかし、「三年、子無きは去る」とか、「あととりがなければお家断絶」といった血統を重んずる封建思想とは違った意味での合理性もありそうです。徳川末期から明治にかけての貧乏士族の家では、家の系図といっても、こんな形で受け継がれていた、あるいは受け継がれることが認められていた、ということかも知れません。

長崎姓の由来

○長崎
　村松の長崎家のことについては、次の機会に話すつもりですが、せっかく「姓の継承」の話が出たので、長崎姓の由来について話してみましょう。これから話す長崎姓の由来は、実は私と私の弟、真人（まひと）との共同というよりも、真人の記述がもとになっているのです。
　というのは、今から六年前の五月三日、父母の喜寿を祝って我われ兄弟姉妹五人が村松に集まる機会があった。時に、父武（たけし）七八才、母ノフ七七才。その子五人、私を長男に男、女、男、女、男の三男二女。その孫一二人、そのひまご三人。それぞれの配偶者七人を合わせると、実に二九人の大団らんであった。その席上、次男の真人の提案で、長崎家の歴史と一人ひとりの自分史を編さんしてみようということになった。
　日ならずして、各自の資料が集められ、そのコピーが送られてきた。長崎家というのは、代々、昔も今も、物を書くのにこだわりを感じないところがあるらしい。決して名筆ではないが、何とか読めそうな物が集まった。そういえば、長崎家の先祖は村松藩の帳付、記録係をやっていたということを祖父に聞いた覚えがある。しかし、残念ながら、その資料の取りまとめができないまま今日に至っている。そ

れが、今、役立ちそうだというわけである。

真人の調べたところによると長崎（崎）姓のルーツは次のとおりである（原文のまま）。



史上、長崎姓が出てくるのは、古く源頼朝旗上げの時、一一八〇年にさかのぼる。伊賀、伊勢の平氏討滅の戦で、北条時政の軍に従った者に関谷大夫盛国というのがある。これは平重盛の二男資盛の遺子という。この盛国の二男に盛綱というのがあり、時政の子北条小四郎義時の無二の寵臣として軍功あり、一二〇五年義時が執権職についた時、相模守に任ぜられ、以後、長崎姓を名乗る。これが長崎姓の祖という（太平記および尊卑分脈による）。

長崎氏は以後代々、北条家の執事を務め、執権北条高時の代（一三一六―一三二六年）には、長崎高資というのが内管領となり、主家をしのいで、鎌倉幕府の実権を握るに至った。

真人は謡曲をやるだけに文章も然るべき態をなしている。ただ、ここでいう「内管領」がどれほどの地位になるのか、想像がつかない。私なりに調べてみると「室町幕府三代足利義満が、幕府中枢組織における将軍親裁権拡大のため、将軍の分身ともいうべき執事（したがって、軍事指揮権は固有のものである）に一般政務の長官たるの地位を兼備させて、管領

（かんれい）制を確立した」とある（井上光貞編『日本史入門』有斐閣双書、昭和五八年版）。

執権高時と将軍義満との間には四〇年ていどの隔りしかないから、高時の時代既に管領なる地位があり、その最高位を内管領とよんだのではないかと思う。私の想像が当たっているかどうか、誰方か教えてほしい。

真人の記述はさらに続く。

長崎高資の権勢は並び立つ者なく、遂には主人の高時を隠退させて、貞顕を執権につけるなど、幕府をほしいままにし、諸国の御家人たちの反感を買った。高資の専横は鎌倉幕府衰亡の要因となったともいわれる。

新田義貞の鎌倉攻略の時（一三三八年）には長崎一族は最後まで奮戦して、主家と運命を共にしている。

○竹内

あら、あら、そうすると、長崎姓はそこで途絶えてしまったことになるのですか。

○小熊

いや、姓というのは、なかなか絶えるものでない。きっと、戦い敗れた残党の中に長崎姓を名乗る人がいて、何処かで生きのびたのではないかな。

○長崎

そうなんです。そう思われます。真人の記述にもそれらしく書かれていますが、それを引用する前に、またここで私なりに調べたことを付け加えましょう。

歴史学研究会編『新版、日本史年表』岩波書店、一九八六年版によると、

一三二二年（元享二年）執権北条高時の二月、「後醍醐天皇、造酒司に洛中酒屋の課役を徴収させる。またこの頃、洛中神人に諸社の課役を免除し、供御人の名簿を注進させる。春、北条氏内管領長崎高資、津軽安東氏の一族相論に際し、双方より賄賂をとる。よって双方が蝦夷の兵力をひきいれ、合戦となる。」

一三二六年（正中三年）三月、「北条高時出家、弟泰家、金沢貞顕の執権就任に怒って出家し、諸将これにならう。貞顕、身を危ぶんで出家。工藤祐貞、蝦夷征討のため奥州へ出陣。」

一三三一年（南朝は後醍醐天皇の元弘元年、北朝は光厳天皇の元徳三年、院政は後伏見上皇、将軍は守邦、

執権は守時）五月、「吉田定房の密告により、幕府、日野俊基・文観・円観を捕える。八月、高時、内管領長崎高資を討とうとして失敗。後醍醐、神器をもって笠置山に入る。」

一三三三年五月、「六波羅落ち、探題仲時ら、四三〇余人、近江番場で自殺。後醍醐、笠置遷幸以後の叙任を無効とし、光厳天皇、正慶の年号を廃止。新田義貞、鎌倉を落とし、北条高時以下の一門、東勝寺で自殺。鎮西探題滅ぶ。」

一三三八年七月、「新田義貞、斯波高経と越前藤島に戦い死ぬ。八月、北朝、足利尊氏を征夷大将軍とする。」

○長崎

少し引用が長過ぎましたが、ひょっとしたら我が長崎家とかかわりがあるかも知れない長崎高資の生きた時代的背景がうかがえるので、あえて引用してみました。激動の中で、実権を握り、賄賂をとったり、討ち滅ぼされようとしたりしながらも、最後には主家と運命を共にした姿が目に浮かぶようです。高資という人は、武将ではなく、有能な実務家だった、と思われます。村松の長崎家も、記録係として細々ながら村松藩の禄を食んでいて、どうみても武器を取って戦う役目には向かなかったと考えると、何百年も隔たっているのですが、やっぱり血のつながりを感じますね。

真人の記述の続きを書いて、今回のしめくくりとしましょう。

次に記録上長崎氏が見られるのは、徳川幕府が作成した寛永系図および寛政重修諸家譜である。それによると、長崎伊豆守元家というのが、織田信長、豊臣秀吉につかえ、関ケ原以後は徳川の家臣となっている。この長崎元家の子孫が、江戸時代を通じ代々旗下として千数百石を知行し、日光普請奉行、駿府町奉行、虎門、市谷門奉行などの役職をつとめている。この長崎氏の祖は、先の鎌倉幕府滅亡の折、辛くも敵陣を破って伊勢へ逃れた長崎高盛（内管領長崎高資の孫）だという。

（ながさき　あきら＝にいがた県民教育研究所会長）

（続）